

●モノグラフ

## 小学生ナウ

Vol. 11-3

# 「登校拒否」 —母親調査から—

### 目次

要 約	2
はじめに	6
第1部 母親の子ども時代の「登校拒否」体験	
1. 学校は楽しかったか	
●「学校に行きたくない」気持ち	9
2. 行きしぶりの体験—ケースを中心に—	
●幼稚園時代	12
●小学生時代	14
●中学生時代	22
●高校生時代	24
●なぜ、立ち直れたか	26
3. 学校不応の実態を追って	
●きっかけとその原因	28
●発達段階との関連で	31
第2部 わが子の「登校拒否」体験	
1. 行きしぶりの体験	
●子どもの環境適応力	37
●「登校拒否」傾向の出現率	40
2. ケースの中から	
●幼稚園時代	42
●小学1年生	46
●小学2年生	50
●小学3年生	52
●小学5～6年生	54
3. 行きしぶりの全体像	
●きっかけと期間	56
●子どものタイプとの関連で	59
4. 母親を支えるもの	
●母親が相談した人	61
●今後、登校拒否を起こす可能性について	63
●母親たちの考える対応策	64
まとめに代えて	66
資料1 調査票見本	67
資料2 基礎集計表	77

# 調査レポート

## 「登校拒否」

—母親調査から—

### 要約

千葉県総合教育センター所員 中原美恵  
東京学芸大学教授 深谷和子

1. 本調査は、教師や臨床家の目に届かなかった登校拒否傾向（学校への行きしぶり）の実態を、母親自身の体験、母親がわが子の上に見いだした体験の2つの角度から明らかにしようとしたものである。



2. 母親の中で子ども時代、学校に行きしぶって両親を困らせたことのある者は、全体の4分の1にも達する（図1-3）。また、行きしぶりにまでは至らなかったものの「学校に行きたくない」気持ちがあったことを記憶している者は、半数を超える。（図1-2）

3. 今も昔も行きしぶりのきっかけは、友人関係のトラブルが主なもののようだ(図1-4、図2-6)。また原因は「本人の性格的ひ弱さ」だと、母親たちは考えている。(図1-5、図2-8)

4. 登校拒否や行きしぶりから立ち直った原因は、1) 母親・家族の援助、2) 友人の援助、3) 教師の援助、など様々だが、4) 自分自身の力で、5) 時期が来て、も多く多様である(表1-1)。残念ながら、相談機関の援助をあげたケースはほとんど見当たらない。



5. 学校不適應のきっかけや原因は、「性格的ひ弱さ」を共通の第1因として、発達段階別にみて、1) 幼稚園時代は「環境への慣れにくさ」、2) 小学校時代は「担任の指導上の問題」、3) 中学校時代は「友人やクラス内の問題」、4) 高校時代は「家庭環境上の問題」が第2因としてあげられている。

(表1-3)

調査レポート／「登校拒否」  
—母親調査から—

要 約

6. わが子がこれまで学校へ行きし  
ぶった体験をもつ母親は、「はっきりあ  
った」9%、「少しあった」35%で、合  
わせて44%にもものぼる。(図2-4)



7. 行きしぶりから立ち直るまでの期間は、  
幅が大きく、1週間以内で解消したケースが  
42%、他方6か月以上続いたケースも15%あ  
る(図2-7)。行きしぶりが長びいたケー  
スでは、クラスや友人関係に問題があり、「担  
任の指導が適切でなかった」と考える母親が  
多い。(表2-2)

●調査概要

1. 調査主題 登校拒否
2. 調査視点 母親自身の「行きしぶり」体験や親から見た子どもの「行きしぶり」体験を通して、今日の登校拒否への対応の手

がかりを探っていく。

3. 調査項目 母親の登校拒否傾向・その原因、立ち直りのきっかけ、子どもの登校拒否傾向・その期間と原因、母親の対応策、など。



8. 「ひょっとしてわが子が将来、登校拒否を起こすかもしれない」と不安に思っている母親は、残りの小学校時代については17%だが、中学校時代については33%もいる。また当然のことだが、過去に経験のあった場合は、6割近い数字にまではね上がる。(図2-13)

9. 登校拒否の予防や治療のための対応策として、母親たちに求められているのは、教師が専門的指導力を備えること、専門(相談)機関の充実である(図2-14)。この期待にわれわれは、それぞれの立場から応えるべきであらう。



- 4. 調査時期 1990年10月
- 5. 調査対象 首都圏の3つの小学校に通う児童(1~6年生)のお母さん
- 6. 調査方法 質問紙調査

7. サンプル数 (人)

性/学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男子	37	38	56	97	131	131	490
女子	42	68	57	100	115	139	521
計	79	106	113	197	246	270	1,011



## はじめに

登校拒否の子どもが4万人を超えたと騒がれたのは、一昨年のことであった。さらに翌年には、その記録をまたもや更新する47,287人というデータが文部省から発表された。子どもが減少しているにもかかわらず、「登校拒否」は増え続けている。この10年のうちに、小学校では約2倍、中学校では約4倍にもものぼる勢いである。また、文部省の統計は「学校嫌い」を理由として50日以上欠席した子どもの数（学校報告による）であるから、もう少し軽症の子どもを含めると、「登校拒否」の実態は、この何倍にもふくらむとの声もきかれる。量的にも、質的にも、その実態の把握は難しく、原因もその予防の決め手も十分には見いだせない今日、登校拒否増加の報道は、われわれの不安をかきたてる。

そこで本調査は、統計上、必ずしも「登校拒否」としては拾い上げられない「学校に行かない」子どもたちの実像に接近するために計画された。具体的には、次の2つのパートから成っている。

①かつて子ども時代に体験した「登校拒否」を親たちに回顧してもらうこと。考えてみると、昔、「登校拒否」の語が知られていなかった時代にも「学校に行きたがらない」子どもはいたのではないか。今、親の世代にそのような子ども時代の体験をたずねることで、今日の登校拒否への対応の手がかりが得られないだろうか。

②子どもが「学校に行かない」と言い出したとき、最も身近にいて対応に迫られるのは親である。そうした場合の、とくに母親の目を通して、学校へ行きたがらない子どもの実態に迫ってみたい。こうした資料は、教師にも臨床家にもなかなか入手の機会がないものであるから。

そこで、本調査では、小学生の子どもを持つ母親たちを対象に、調査票作成にとくに配慮を加え、回収も個別に封筒に入れて行った。

幸い、学校・PTAの了解のもとに、何とか3つの学校で実施することができた。回収率は72%であり、多くの熱心な回答が寄せられた。中には、「父親調査も必要では」との提案もあり、「登校拒否」問題への関心の高さを感じさせられた。

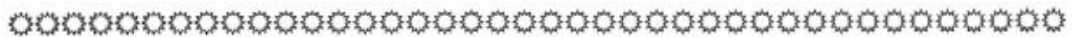
なお、調査対象は、首都圏の住宅地にある3つの小学校の、1年生から6年生までの子どもを持つ母親1,011名。調査時期は、平成2年10月であった。



第1部

母親の子ども時代の  
「登校拒否」体験

\*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。



調査対象となった母親たちの年齢は、巻末の集計表に掲げたように、30代後半が45%。ちょうど東京オリンピックのあった頃に小・中学生期を迎えていた世代で、いわば、わが国の高度経済成長とともに育った人々である。

医療機関や教育相談機関に、「学校に行きたいのに行けない」子どもの相談が寄せられ始めたのは、昭和35年頃と言われる。「長欠児」といえば、かつては病弱か非行か貧しさの故に働き手として学校を欠席していた子どもだった。それが「登校拒否」と呼ばれるタイプ

に変わってきたのが、この母親たちの子ども時代である。当時、「登校拒否」の子どもの新たな出現の下での親や教師の戸惑いは大きかった。臨床の専門家たちでさえ、登校拒否の知識を持たない者も多かった。

こうした時代に、学校不適應に陥った子どもたちは、どのようにしてそれを乗り越え、成長していったのか。ここでは、母親に子ども時代を振り返ってもらい、学校への「行きしぶり」体験や、「行きたくない」気持ちの克服の過程を中心に探してみたい。





# 1. 学校は楽しかったか



## ■ 「学校に行きたくない」気持ち IIII

かつての子どもにとっては、学校は今よりもっと楽しい場だったのか。母親たちに幼児期から高校生期までの学校生活の楽しさについて振り返ってもらった。図1-1を見ると、「楽しかった」と答えた母親は、どの時期についてもほぼ半数である。図の右端、「あまり・ぜんぜん楽しくなかった」と答える層は1割ほどだが、これと「まあふつう」という素っ気ない回答を合わせると、「小学生時代はそれほど楽しくなかった」という母親たちも、意外に多い。

では当時、実際に学校に「行きたくない」気持ちをもった子どもはどれだけいたのか。図1-2によると、「はっきりあった」が9%、「少しあった」が44%。合わせると、ちょうど学校が楽しくなかった割合と同じで、ほ

ぼ半数にのぼる。女子についてのデータではあるが、この世代の子どもたちも、時に「学校に行きたくない」気持ちと戦いながら暮らしていた様子がうかがえる。学校はいつの時代も、子どもたちにとってストレスの多い場なのだろう。

では状況が深刻化し、親たちを手こずらせた経験をもつ者は、どのくらいいたのか。「なんとなく学校に行きしぶって、両親を困らせた経験」については、図1-3に示したように、全体の25%が体験している。

これまでみたように、母親の世代の半数がその成長過程で学校へ行きたくない日々の体験をもち、さらにその半数が実際に登校への抵抗を示し、周囲のおとなたちを戸惑わせた。そして、こうした体験は、十数年を経た今で

もかなり鮮明に思い起こせるほどのものだったらしい。次にアンケート用紙の記述欄いっ

ばいに記された子ども時代のエピソードをたどりながら、少し詳しく追ってみたい。

図 1-1 学校は楽しかったか（母親の子ども時代）

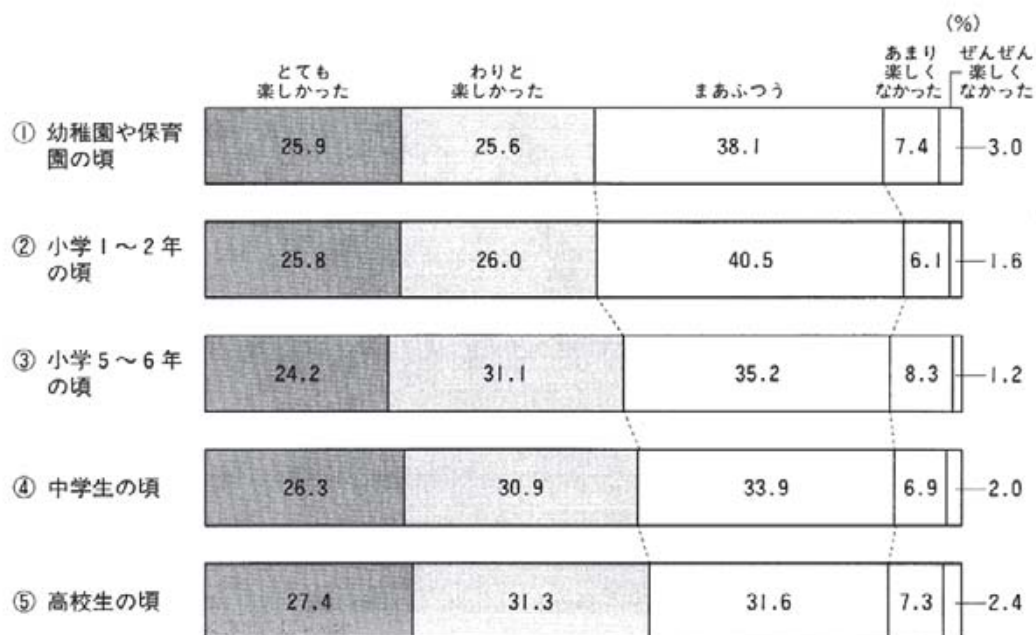


図1-2 行きたくない気持ちがあったか（母親の子ども時代）

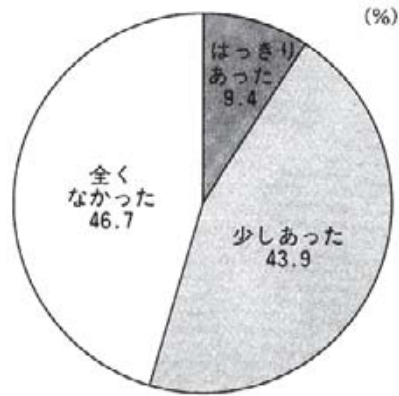
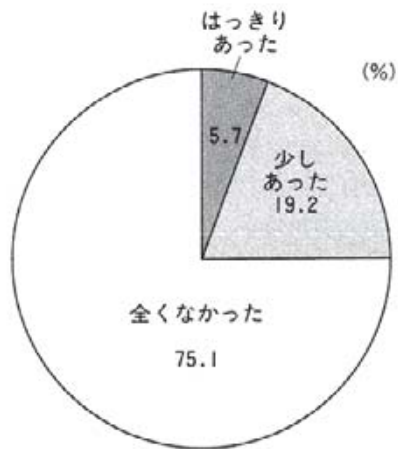


図1-3 学校に行きしぶって、親を困らせたこと（母親の子ども時代）



## 2. 行きしぶりの体験—ケースを中心に—



人はおとなになった今も、かつて学校になじめなかった自分の姿をこれほど鮮やかに思い起こせるものだろうか。ここでは、そうした記述の中から、発達段階に特有の典型性を示す事例をいくつか取り上げた。類似したケースについては、比較的期間の長いものを選んだ。内容は、

- 1) 「行きしぶった」頃の状態
- 2) そのきっかけ
- 3) 時期
- 4) 原因と思われること
- 5) なぜ、立ち直れたか

の5点について、まとめてある。

### ■ 幼稚園時代 III

初めての集団生活を体験するこの時期。家庭と園のギャップが大きかったり、集団生活への準備が十分でなかったり、幼いながら子どもは適応に苦勞している。M-2のようにおとなばかりの間で育つ子どもは、とくに友人とのトラブルに傷つきやすい。M-3の場合は、親と教師の対応で早い時期に解決されている。また子どもにとっては、M-1のよ

うに無理押しせずに機が熟すのを待つ母親の存在が心強いようである。

幼児期には、親のほうもゆとりを持って接しられるのか、この他にもゆっくり適応を図る対応が多く見られた。

今回、幼児期については、保育園に通った場合についてもたずねている。しかし、ここにもあげられなかったように、保育園時代の

行きしぶりは、ほとんど報告がなかった。入園時の分離抵抗などの例もあったが、結局、母親は子どもをおいて仕事に出かけるしかないことを子ども自身が知っていて、長びかない。今よりもずっと共働き家庭が少なく、親も子ども必死の思いで切り抜けていた時代だっ

たのかもしれない。とすると、幼児期の登園拒否は、親と子の双方に心の揺らぎ、不安が強い場合、長期化しがちであると言えそうである。こうした場合、まず母親の不安を支え、教師への信頼を回復させるように援助することが必要であろう。

## 事例●幼稚園時代 ((年齢), 性別, 行きしぶりの期間)

### CASE M-1

(幼稚園 (8歳), 女子, 1年くらい)

#### ①状態

幼稚園の頃、数日は通園していたのですが、すぐ通園しなくなり、母と一緒にすごした。たぶん、友だちができなかったように思います。

#### ②きっかけ

友人との関係。

性格的にひっこみじあんで、人に慣れるのに時間がかかる。

#### ③時期

入園当初から、1年間くらい。

#### ④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 新しい環境に慣れにくいタイプだった。

#### ⑤なぜ、立ち直れたか

1. 母が幼稚園に行かないのをあまり責めなかった。
2. 「自分で行く」と決める心の余裕ができたときに、園に行くようになった。

### CASE M-2

(幼稚園 (5歳), 女子, 1年間くらい)

#### ①状態

男の子に多少いじめられやすかったのかもしれない。祖母が園まで送ってくるが、姿がみえなくなると泣いて、そのまま家に帰ってしまうこともしばしばだった。

#### ②きっかけ

友人との関係。

祖父母に育てられ、おとな社会ですごしていたので、うまく友だちとつきあえず、仲間に入りにくかったことへの不安。

#### ③時期

年中～年長にかけて、ほぼ1年間続いた。

#### ④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 友人やクラスに問題があった。

#### ⑤なぜ、立ち直れたか

はっきり原因はわからないが、しかたなく通園していたように思う。

小学校は行かなくてはいけないという思いがあったらしく、1日も休まずに6年間すごしている。

### CASE M-3

(幼稚園 (5歳), 女子, 1か月間)

#### ①状態

くわしいことは記憶していませんが、だいたい自分ではがまんしていたのではないかと思います。ある日、「幼稚園に行かない」と泣いて困らせ、心配した父が、担任の先生に事情を説明したと思います。

#### ②きっかけ

友人との関係。

近くの席のお友だちが数人(2人?)で、他人のはきみetcを私の引き出しに入れておき、「どろぼう」あつかいされたと記憶し

ております。当時、路線バスで通園しておりましたので、帰りは人よりも早く園を出なければならなかったと思います。

### ③時期

幼稚園生活にも慣れ、少しずつお友だちもできてきた頃だと思いますが……。あるとき、席替え（幼稚園ではわりとひんぱんに行われます）をしたときと記憶しております。

### ④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 友人やクラスに問題があった。

### ⑤なぜ、立ち直れたか

担任の先生に事情を説明し、（先生は何もご存じなかったそうですが）わかっていただき、席替えをしてもらったと思います。そこで、新しい友人と楽しくすごせたのではないのでしょうか。

## ■ 小学生時代 III

どの時期よりもこの6年間の体験に関する回答が多く、レポートの半数以上を占めている。しかし、ひと口に小学生といってもこの6年間の子どもの成長は著しい。事例の内容をみても、低学年、中学年、高学年とそれぞれに特徴がある。例えば、1年生の頃は「転居のため環境も変わり、友人もいないまま入学した子ども」や、ただ「母親と一緒にいたい」というタイプが多い。幼稚園時代と同様、新たな人間関係が結べないタイプの子どもである。

それが3～4年生になると、学級担任への反発や子どもの世界のいじめに起因するものなどが中心になる。子ども集団への適応とおとなからの自立の準備を反映するものと言えよう。この時期、「学級内でおもしろをした」という外傷体験から、引きこもるようになったタイプも何例も見られた。ほとんどの場合、

「教師がうまく援助してくれなかった」と記されており、対応の難しさが示されている。

5～6年生になると、いじめも深刻になり、教師不信も一層強くなる。自己への信頼感も揺らぎ、ゆううつな時期を過ごす子どももでてくる。M-21のようにそれが長期化する背景には、家族の中に葛藤状態があり、子どもを支える力を持っていないケースも見られる。子どもが置かれている状況を把握し、問題の意味を理解しようという姿勢がないとつい見落とされがちな事例である。

また、事例を通してみて、ひとつ気がかりなのは、親の仕事の都合で何度も転居しなければならない子どもだ。皆、適応に苦勞していた様子が見られる。度重なる転校のため、M-4のように「新しい友だちをつくるのがめんどろになった」という子もいる。今日でもひんぱんな転居があるのだろうか。

### 事例●小学生時代（学年、性別、行きしぶりの期間）

#### CASE M-4

（小学1年生～4年生、女子、4年間）

#### ①状態

両親が離婚のことでいつもけんかしていた。

はっきり決着がついたほうがずっと気は楽だったはずだが、どうなるのかわからなかったのでいつも不安だったし、何もかもいやだった。

無気力だった。

## ②きっかけ

その他。

何度も転校させられた。やっと慣れるとまた転校をくり返してきたので、新しい友だちをつくるのが高学年になるにつれてめんどうくさいと思うようになってしまった。好奇心の目にさらされることが苦痛だった。両親のことでいつも真っ暗な気持ちだった。

## ③時期

幼稚園を途中で変わり、友だちができないまま、小学校に上がり、知っている子が1人もいなかったし、担任の教師が大嫌いによく反発した。親の転勤の都合で転校させられた(何度も)。幼稚園から中学までの数回、5回くらいだったと思う。両親の問題は、中3から高校卒業するまで4年間以上続いたので、その間ずっと。

## ④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 家庭環境に問題があった。
3. その他(親にすごく問題があった)。

## ⑤なぜ、立ち直れたか

立ち直ったのではなく、あきらめたためだと思う。  
表面上、普通を装う術を身につけた。  
両親の問題は解決しなかったで元気にはならなかったけど……どうにもならないとわかりあきらめました。1日も早く高校を卒業してつまましい家を出ることを思いたち少しは元気になった。

## CASE M-5

(小学1年生, 女子, 4か月間)

## ①状態

親や近所の人や知人に無理やり引っぱって行かれたり、行ってもすぐ、抜け出して帰って来たりした。

## ②きっかけ

友人との関係。  
同じクラスの後ろの席や並び順が後ろの人に、しつこくいたずらをされても、泣くこ

とも、怒ることもできなかったので、ますますいたずらがひどくなってきて、登校がいやだった。また、公共物の使い方がわからなかった。その上、人に聞けなかった。

## ③時期

小学校入学から、転校する夏休みまで。

## ④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 新しい環境に慣れにくいタイプだった。

## ⑤なぜ、立ち直れたか

転校してから、親戚のお姉さんに今までに受けたことがなかった親切を受け、また、近所のお友だちもひ弱な性格の私をいやがらず、いろいろとかばってくれた。  
田舎へ1年の2学期から転入してから、親戚のお姉さんたちと仲よく学校へ行ったそうです。

## CASE M-6

(小学1年生~2年生, 女子, 9か月間)

## ①状態

- ・1年生の夏休みに引っ越しして。
- ・教室がくらかった(体育館を区切って教室にしていたような記憶がある)。
- ・先生の印象(太って、背が高く、男の人のようにでした。女の先生です。黒い服ばかり着ていました)。

## ②きっかけ

1. 友人との関係。
2. 先生との関係。
3. その他。
  - ・頭のいい子に対してのえこひいき。
  - ・まちがったテストのやりなおしで、書きなおしてもっていき、「人を見たでしよう」とうたがわれた。
  - ・同じことをしても、怒られる子と怒られない子がいた。

## ③時期

1年生の2学期から2年生の1学期の途中まで。引っ越しして解決。

## ④原因

1. 担任の指導に問題があった。
2. 友人やクラスに問題があった。
3. その他（自分自身、先生に対し偏見があったかもしれない）。

- ⑤なぜ、立ち直れたか  
引っ越し。

#### CASE M-7

（小学2年生、女子、6か月間）

##### ①状態

朝になると、おなかが痛いとお母さんを困らせていました。私はよく覚えていませんが、お母さんが言っています。

##### ②きっかけ

1. 先生との関係。
2. その他。

高知の農村育ちの私が東京の小学校に転校し、その環境の変化、先生がきびしく冷たい人だったのが原因だと思います。返事をするとき「うん」と言うと、「ここは田舎ではないので「はい」と答えなさい」と言われたのがすごくいやで悲しかったことだけははっきりと覚えています。友だちはいい人ばかりでしたが、とにかく先生だけがとてもいやでした。

##### ③時期

小学校2年の5月、転校してから。

##### ④原因

1. 担任の指導に問題があった。
2. その他（農村と大都会の差は、当時では日本と外国くらいの差があったように思います）。

##### ⑤なぜ、立ち直れたか

母親の愛情、家族、妹(2人)、弟、友だちと、いやなこともふきとばす環境が先生以外にいっぱいあったことだと思います。何より心が一番大切なもの。

3年になり担任がかわり、そのようなことはなくなりました。

#### CASE M-8

（小学1年生～3年生、女子、3年間）

##### ①状態

母親と離れられず、1～3年まではたとえ姉妹が同じ学校にいても、いつも1人では教室に行けなかった。

（私は廊下に母親の姿が見えなくなると、すぐに教室を飛び出すので、給食のおばさんや先生が私の後を追いかけて、家にたどりつくのが、ほとんど毎日だったようです。）

##### ②きっかけ

何もきっかけはなかったようです。

##### ④原因

その他（ただ、母親と一緒にいたかっただけのように思う）。

##### ⑤なぜ、立ち直れたか

これもまったくなし。急に今日から行こうと思った。4年生の時、突然目が覚めたように1人で行きはじめ、クラブ活動の部長や児童会の役員を引き受けるようになり、中学校は私立に1人だけ進学し、1時間ほどの通学時間を使って通うようになった。両親がこのことに関して何も叱らずに「まあ！また帰ってきた。先生もご苦労さまでした」というだけだった。

#### CASE M-9

（小学2年生、女子、1～2日間）

##### ①状態

2年生まではりきって学校に行ったが、あることで失敗をし、それを気にし学校に行くのがいやになった。

##### ②きっかけ

1. 友人との関係。
2. 何かの失敗。

小学校2年生のテストの時間、先生にトイレに行かせないと言われ緊張してテストを受けていたところ、トイレに行きたくなりがまんしていたが、ダメで失敗をしてしまった。それまで先生にほめられたりしてい



ただけに、その時の先生や友人の顔がショックだった。

③時期

行きたくないと思ったのは1日だったが、その後何年間か、その時の失敗は忘れられなく、積極的になれなかった。

④原因

性格的にひ弱だった。

CASE M-10

(小学1年生～3年生、女子、3年間)

①状態

兄弟が多く、ほとんど友だちがいなくても淋しくなかった。保育園に通っていなかったのので、友だちがなかなかできません。1人遊びを好んでいたようです。担任の先生が大嫌いだった。

②きっかけ

1. 先生との関係。
2. 学校の行事や授業。

先生への不信心（おさがりの洋服で、清潔でなかったのので、先生はきたないものを見るように接していた。授業中目が合ったときの顔はいまでも忘れることはできない）。

③時期

1～3年生の毎日。

④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 担任の指導に問題があった。
3. 新しい環境に慣れにくいタイプだった。

⑤なぜ、立ち直れたか

4年生でクラス替えがあり、先生と別れたから。お友だちは数人いたのので、学校が少しずつ楽しくなってきた。6年生の時、担任の先生宅まで遊びにいきました。先生も喜んでくれました。

CASE M-11

(小学3年生、女子、1～2週間)

①状態

頭が痛くなったり、おなかが痛くなったりしました。朝、起きた頃はそんなに痛くも感じないのが、学校へ出る時間になると、本当に痛くなったのを覚えています。不思議ですね。

②きっかけ

1. 先生との関係。
2. 学校の行事や授業。

小学校の頃は担任の先生があまり好かず、勉強に関しては算数で時計をやる頃、あまり得意ではなかったため、行きしぶっていたのをはっきりと記憶しております。

③時期

小学3年生の2学期頃だったと思います。

④原因

担任の指導に問題があった。

⑤なぜ、立ち直れたか

小学4年生になって、担任の先生がかわり、その先生が大好きになり、勉強のほうも、それからのびてきたように思います。

CASE M-12

(小学3年生(転校すること)、女子、1週間くらいずつ何回か)

①状態

転校が多く、転入しての約1週間は、親にあまり駄々も言えず、小さい胸をいっぱい悩ませ、自分との葛藤を続けた。自分なりにはやくとけこもうと努力していた。しかし、約1週間というその期間の朝は、何ともつらかった。

子どもの世界にも派閥があり、何となく、私の強いチャラチャラしているようないばっている女の子数人のグループがあり、何か、それがとてもいやだったという記憶と、病気とかでお休みすると、私自身、自意識過剰の女の子だったのか、その休みあけの登校がとてもはずかしく、ずっと入れなか

った。

②きっかけ

私の場合は、転入時や病気あけのときの気はすかしい気持ちが高じて、登校拒否気味の気持ちになっていたようです。

④原因

新しい環境に慣れにくいタイプだった。

⑤なぜ、立ち直れたか

小さいながらも自分自身の心のたたかいでのりきった。多分に母親のはげましや人としての成長のあり方を、その年齢なりに言われつづけてきたことがバックボーンになっていると思うが……。とにかく、人のせいではない、自分に勝たなければならないと幼い頃から言われたし、自分もそう思ってきた。

CASE M-13

(小学3年生～4年生、女子、1年間くらい)

①状態

保育園時代、妹が足が悪くなり、母は妹と病院通いをするため、家にいることが少なかった。そのため、一緒に病院についてきたくて、朝、保母さんが家まで迎えにきてくれたが、何度も行かない日があった。

②きっかけ

1. 先生との関係。
2. 成績。

3年生の新学期に転校した。

3、4年生の時の担任の先生がえこひいきの強い先生で嫌いだった。宿題のプリントを月の初めに20～30枚、1度にだされ、1か月後にまとめて提出というような指導をしていて、それが完成しなかった月などは行きたくなかった。毎日、1枚ずつやればよかったのだろうが、それができず、毎月、提出日は登校するのがそうとうの苦痛だった。

③時期

3年生の1学期後半～4年生の2学期の始め、先生がお休みになるまで。

④原因

1. 担任の指導に問題があった。
2. 友人やクラスに問題があった。

⑤なぜ、立ち直れたか

4年生の2学期の始め頃、担任の先生がノイローゼになり、学校を休職して、1クラスが3つに分かれ、他の担任のクラスにかわったから。

CASE M-14

(小学4年生、女子、1年間くらい)

①状態

クラスの皆から孤立してしまった。

②きっかけ

何かの失敗。

小学4年生の時にどうしてもがまんできなくて、学校でおもらしをしてしまい、そのことでクラスの皆からからかわれ、きらわられていき、自分自身も暗い性格になってしまった。

③時期

4年生の夏頃から1年くらいの間。

④原因

その他(内向的になり、多少のひがみがあった)。

⑤なぜ、立ち直れたか

担任の先生がクラスの問題としてとり上げ、皆で思っていることをよく話しあった。

CASE M-15

(小学3年生～5年生、女子、3年間)

①状態

先生は嫌いでしたが、友人がたくさんいたので、学校には行っていました。

②きっかけ

先生との関係。

小学校3～4年は40歳前後の男の先生で、とにかく陰険で大嫌いでした。

5年の時、30歳前後の女の先生にかわったのですが、その先生はすぐに生徒に手を上

げる人で、その先生も陰険で好きになれませんでした。

③時期

小学3年生～5年生。

④原因

担任の指導に問題があった。

CASE M-16

(小学3年生～6年生, 女子, 4年間)

①状態

母は2度目の母で、弟が5人いて、8人家族のため、生活が苦しく、私にはきれいな洋服も買ってもらえず、学校では私は「ゴキブリ」ときらわれていた。心の中では学校が本当にいやだったのだけれど、母の苦勞もわかるし、学校は絶対に行かなければいけないものだと思っていたので、あきらめの状態で、ただ学校に行っているだけという感じだった。

②きっかけ

1. 友人との関係。
2. その他。

③時期

何回もあった。

④原因

家庭環境に問題があった。

⑤なぜ、立ち直れたか

私は学校でみんなからきられていて、これではいけないと思いました。家庭環境を変えることはできないので、私自身が変わろうと思いました。友だちに何を言われても気にしないようにしよう。そして、友だちにはやさしくしようと、中学生になった時に思いました。そうしたら、だんだん友だちがふえてきました。

CASE M-17

(小学5年生, 女子, 1か月くらい)

①状態

朝、起きるのがいやで、ランドセルを背負うのがつらかったのを覚えています。頭が痛いという理由で1日だけ休んだように思います。5年生の秋頃だったと思います。母にそのことを相談したら、私の口のきき方が乱暴だったからだと言われ、その時はムツとした気持ちだったと思います。母はただ、みんなにあやまりなさいと言っただけで、私は寂しくつらかったことを記憶しています。

②きっかけ

友人との関係。

5年生の時、放課後に仲間とドッジボールをしていたら、男子生徒に入れてほしいと言われ、ダメと断ったことからさわぎが大きくなってしまった。態度が悪いとか、口のきき方が悪いとか言われ、ホームルームにまで取り出された。あげくに、そばにいた女子生徒数人からも私ひとりの責任にされ、うらぎられた気持ちでいっぱいでした。ただ1人だけ私のそばにいつもいてくれた女の子がいたから登校拒否もなく、何とかやっていけたのだと思います。

③時期

5年生の秋頃から1か月くらい続いたと思います。

④原因

1. 友人やクラスに問題があった。
2. その他(自分自身の性格が勝気で、相手の気持ちを理解できなかったのだと思います)。

⑤なぜ、立ち直れたか

やはり時間が解決してくれたと思います。私の場合、クラスの大半から口もきいてもらえず、いつも2人でいましたから、そのうちかわいそうに思う生徒が数人出てきて、その人たちがまたホームルームにその話題をもってきて、クラスのみんなもわかって

くれたようでした。

### CASE M-18

(小学4年生～5年生、女子、1年間)

#### ①状態

心の中に行きたくない気持ちはあったが、親にそれを言えなかった。私の中で親の存在は絶対なものであり、親（とくに父）が恐かった。どんな状態であれ、学校は行かなければいけないものと、1人で思いこんでいた。

下記の(2)の時の場合は、期間が長かったので……（大体1年間ほとんどだった）耐えられず、母に行きたくないと言ったが、理由を問われ、何でもないと答え、そのまま登校した。親が恐かったのもあったが、心配させたくもなかった。

#### ②きっかけ

1. 友人との関係。
2. 先生との関係。

(1) 授業以外の先生の大事（と思われた）な話の時間、おもらし（大便）をしてしまった。小4年生の時で、年齢も高く、皆からはやしたてられたのもあったが、担任の女教師がなじったのが今でも悲しい。

(2) 5年生の時、仲のよい友人にふとしたはずみで聞きかじった“絶交”という言葉を経験し、軽い気持ちで宣言してしまい、クラス中の女子が私たちは敵と言い出し、裁判ごっこ称して女子全員から仲間はずれにされた。相当長い期間で回復はしなかった。

#### ④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 担任の指導に問題があった。
3. 家庭環境に問題があった。

#### ⑤なぜ、立ち直れたか

(1)の時は、時間が経つのを子ども心にひたすら待った。

(2)の時、担任（女）が、私の黒板をみつめる目が異常に怖い、何かあるのかと放課後聞いてくれた。

（1人の友もいなくなった私は、最後は勉強は誰にも邪魔されない時間であるから、誰にも負けないんだ、と思いながら授業を受けていた。）

今までの経過を話したところ、私の心情をよく理解してくれ、クラスの女子とも和を図ってくれた。いつもPTA会長の娘しか役がまわらなかった通知簿を受け取る行事にもチャンスを与え、私に自信を与えてくれ、努力してくれた。友人たちとはすっかりは仲良くはならなかったが、私に前向きに生きることを教えてくれた先生だった。

### CASE M-19

(小学5年生～6年生、女子、2年間)

#### ①状態

なんとかがまんして学校に通いました。

#### ②きっかけ

先生との関係。

(1) 先生（担任）が女の先生でしたが、授業中に生徒にだけ自習させて、自分はとなりの男の先生と一緒に生徒の目の前でお茶を飲み、その茶菓子を自分の気に入っている生徒にだけ与えることをした。

(2) 生徒の気にさわるような言葉を平気で言って、精神的に傷ついた生徒が多かった。

#### ③時期

5年の春に担任の先生がかわってから。

6年は同じ先生がもちあがりでしたので、6年卒業まで。

#### ④原因

1. 担任の指導に問題があった。
2. 友人やクラスに問題があった。

#### ⑤なぜ、立ち直れたか

成績を上げてみんなや先生をみかえしてやろうと思った。（自分自身の気持ちの持ち方）

## CASE M-20

(小学5年生～中学3年生, 女子, 5年間)

## ①状態

クラス全体からいじめにあっていました。両親はとてもきびしかったので、学校に行きたくないなどといえはなぐられたり、家を追い出されたりするので、親には何もいわずだまって学校には行っていました。本当は死にたいくらい学校に行きたくありませんでした。

このことを結婚してから親に話したら、本当に驚いていました。それと子どもの心の奥はわからないものだといっていました。

## ②きっかけ

1. 友人との関係。
2. 先生との関係。

今思うと、友人とのトラブルというよりもクラス全体のストレス解消的存在だったのではと思います。何度か先生にうったえてみましたが、クラス全員の前で「いじめているのは誰ですか」というだけで(もちろんそんな時に手をあげる人は誰もいません)後はいくらうったえても「うるさいわね」と一言で片づけられてしまい、先生からもきられてしまいました。その後は誰にも相談することもなく、1日が早くすぎてほしいと思っていました。

## ③時期

小学校の5年生の春から中学校を卒業するまでの5年間苦しみました。

小学校の5年生の時、もっと適切に担任の先生が対処してくれていれば5年間も苦しまずにすんだと思うと、いまだにその担任の先生が憎いです。

## ④原因

1. 担任の指導に問題があった。
2. 友人やクラスに問題があった。

## ⑤なぜ、立ち直れたか

楽しい学校生活ができるようになったのは先生のおかげではなく、高校生になって同じ中学校からの入学者が少なく、私がいじ

められっ子だということを知る人が少なかったからでした。

本当の自分を出して(本当は明るい性格だったんです)、のびのび勉強ができました。

## CASE M-21

(小学4年生～中学3年生, 女子, 6年間)

## ①状態

小学4年の時、幼友だちだった女の子(近所の)が転校してきた女の子と仲良しになり、まったく遊んだりおけいこに行ったりすることがなくなり、毎日がゆううつでした。

自分自身への自信のなさや近所のおばさんに「〇〇ちゃんは丸々太っていて健康そうね」と顔をあわすたびに言われ、かなり心を痛めた。おとなが嫌いだったと思う。小学校入学から高校を出るまでの間、1度も休まなかったが、ただの1度も手を挙げることはできなかった。それは両方とも、自分の弱さが原因と思っている。先生から声をかけられないようにいつも下を向いてすごした。

## ②きっかけ

1. 友人との関係。
2. 先生との関係。

伸ばしていた髪の毛を男の子3人くらいに毎日のように「馬のしっぽ」と言われたり、ひっぱったりされ……、それを先生が見ていながら注意してくださらなかったりした。

## ③時期

小学4年生～中学3年生卒業まで。

## ④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 担任の指導に問題があった。
3. 新しい環境に慣れにくいタイプだった。
4. 家庭環境に問題があった。
5. その他(父母がいつもケンカをしていた。父が病弱で母が勤めていた。兄弟が男ばかり3人中、私のみ女の子、家族の誰とも口をきかなかった)。

⑤なぜ、立ち直れたか  
高校を少し遠方を選び、これまでの私を知

らない人々の中に身をおき、いつも明るく  
振る舞って高校時代は楽しくすごせた。

## ■ 中学生時代 III

思春期に入ると、仲間はずれやからかいを受け、引きこもりがちな女の子の姿が目立つようになる。M-24のように「受験体制への違和感」やM-25の「強引にリーダー役割を押しつけられたと感じて」の不調などもこの時期特有の心の揺らぎを象徴するものだろう。

M-23では、以前の学級担任が相談にのってくれたことで安定し、問題解決が図られている。小学校と異なり、何人もの教師がかかわりを持つこの時期。うまく教師の援助を得られる子どもは、軽症で切り抜けられるようだ。

### 事例●中学生時代 (学年、性別、行きしぶりの期間)

CASE M-22  
(中学2年生、女子、3か月)

①状態

毎日仲良く待ち合わせて登・下校をしていたが、それもなくなり、クラスでも口をきかなくなってしまい、全然別の友人と親しくなってしまった(相手が)。

3か月くらい、全くひとりぼっちでした。他にもいた友だちもむこうに気をつかい、話しかけてくれませんでした。

②きっかけ

友人との関係。

友人との話の誤解から別の友人が出てきて、なおさら話に誤解ができてしまった。

③時期

季節は忘れましたが、中学2年の時でした。

④原因

友人やクラスに問題があった。

⑤なぜ、立ち直れたか

2~3人のむこうに気がねをしていた友だちが我慢できなくなって、話をかけてくれるようになってから。

CASE M-23  
(中学3年生、女子、2週間)

①状態

学校へは行くものの終わりをまって、飛ぶように家に帰って、1人でくよくよ考え込んでいた。

②きっかけ

友人との関係。

転校後、新しい環境の中で、クラスの班編成があり、他の班員からからかわれたりして、仲間はずれのようなものになり、打ちとけられなかった。

④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 友人やクラスに問題があった。
3. 新しい環境に慣れにくいタイプだった。

⑤なぜ、立ち直れたか

悩んでいたときに、以前担任をしていただいた先生にお会いし、話を聞いていただき、だいふ気持ちちが落ち着いた。その後は、積極的ではないにしろ、開き直りに自分自身で問題解決を図るようになったと思う。

## CASE M-24

(中学3年生, 女子, 6か月)  
(高校1年生～3年生, 3年間)

## ①状態

受験体制の中で、クラスが一人一人バラバラになる時期、別に学校へ行く必要がない気がした。

高1の時、現国の時間に雪が降ってきて、窓から見とれていたら、先生が何度も注意した。同じような次の機会に、授業を聞くよりも雪をゆっくり見たいと早退した。雪景色のほうが価値あるものと思った。

## ②きっかけ

その他。

私は小学校当時から成績がよく（いわゆるとびぬけて）、先生の受けもよく、優等生タイプで、クラスの皆からも人望があった。小学生時代はまだよかったが、中学時代は学力にあきらかに差がでてきて、私自身の中で、学校の勉強と自分の勉強は別という意識があり、学習という面では、学校の存在理由をあまり認めなかったと思う。だから、皆で何かをやる場面の少なくなる中3時代は何となくつまらなかった。

## ③時期

中学3年の秋～卒業まで。

高校1年生～3年生まで。

## ④原因

1. 心の疲れがあった。
2. 体の疲れがあった。
3. その他（親が、学校などは1日や2日休んでも何でもない。家庭のほうが大事という考えだった。仮病で連絡をとってくれたこともあった）。

## ⑤なぜ、立ち直れたか

親の考えと自分の考えが同じだったこと。  
友人がいたこと。  
よい先生がいたこと（同格に扱ってくれた）。

## CASE M-25

(中学3年生, 女子, 6か月)

## ①状態

クラス委員長を薦められ、断っても断ってもしつこく責められ、生徒会会長にまで押し上げられそうになり、あげくの果てに自律神経失調症で2か月入院しました。本当につらい「めまい」の続く日々でした。

## ②きっかけ

1. 成績。
  2. その他。
- 人をリードしていく力もないのに、多少成績がよいからと強引に「長」の座にすわらせようとしたクラスメートや担任の先生のやり方に、今でもいやな思いが消えません。

## ③時期

中学3年生の4月～10月くらい。

途中2か月は入院した。

## ④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 担任の指導に問題があった。
3. 友人やクラスに問題があった。
4. 新しい環境に慣れにくいタイプだった。

## ⑤なぜ、立ち直れたか

隣のクラスの友だちの励まし（1枚のハガキ）。

入院中に友だちのいない私に1枚の励ましのハガキが届きました。ショックでした。私のことをわかってくれている人がいたということ、今まで気がつかずにすごしていたんです。その人のためにも立ち直ろうと決心しました。

## CASE M-26

(中学1年生～3年生, 女子, 3年間)

## ①状態

6年生の時、1人の女子がいじめにあって、修学旅行に行きたくないといいたので、その子も休みがちでした。そこで、先生とクラスで相談したところ、私と何人かの友

だちを先生がその子のために友だちになってあげて、ぜひ修学旅行につれて行ってあげようとなったわけです。

先生の言われたとおり、がんばって友だち何人かと、その子のためにがんばりました。修学旅行も学校も無事卒業できるくらい明るくなったのです。

中学入学当時、よその学校からも人が来ます。そこで、私と友だち何人かといじめにあった友だちをかばったため、私たちまでいじめにあうことになりました。ひさんな中学校時代でした。この頃から、男の人なんか、大嫌いになったと思います。

③時期

中学3年間。

④原因

1. 担任の指導に問題があった。
2. 友人やクラスに問題があった。

⑤なぜ、立ち直れたか

たくさんの方だちにめぐまれたことだと思います。

CASE M-27

(中学1年生～3年生, 女子, 3年間)

①状態

- 自己嫌悪。
- 自信喪失。

②きっかけ

1. 友人との関係。
  2. 先生との関係。
  3. 成績。
- 暴力教師が嫌いだった。

③時期

中学3年間。

④原因

1. 性格的にひ弱だった。
2. 心の疲れがあった。
3. 担任の指導に問題があった。
4. 友人やクラスに問題があった。
5. 新しい環境に慣れにくいタイプだった。
6. 家庭環境に問題があった。

⑤なぜ、立ち直れたか

高校に入学し、環境が変わったから。とても自由な校風だった。

## ■ 高校生時代 III

M-28は、「思春期に入ってから、ずっと集団生活になじめず、周囲との違和感を抱き続けてきた」という。彼女にとって、学校生活は、「ただ、ただ、がまん」の日々だった。教育相談機関にいと、こうしたタイプの子どもに出会うことが多い。感受性が鋭く、極めて感覚的なため、集団の枠や対人関係への抵抗が大きい。ごく普通の人間関係を維持し続ける力が育っていないため、周囲とのトラブ

ルも生じがちである。学校は、彼らにとって決して居心地のよい場ではないから引きこもりがちになってしまう。

また、M-29やM-30のように、入学した高校での「学業指導のプレッシャー」や「進路を決定するまでの不安定さ」から学校不適応に陥るケースも多い。自己の能力を把握し、人生を考える時期だけに、教師のかかわりの持つ意味は大きい。



## 事例●高校生時代 (学年, 性別, 行きしぶりの期間)

### CASE M-28

(中学1年生～高校3年生, 女子, 6年間)

#### ①状態

クラス単位など数の多い単位の活動、行動等が嫌い。

自分の意見をはっきり主張することがまわりの反感をかうのを気にするのが嫌い。

#### ②きっかけ

1. 友人との関係。
2. その他。

#### ③時期

学生時代いつも。

#### ④原因

その他 (気の弱さかと思う。社会人になって、年齢の幅、育ちのちがいのある社会生活は学生生活よりとても生きやすい社会となった)。

#### ⑤なぜ、立ち直れたか

ただ、ただ、がまん。

学校へ行かないという行動が両親の苦痛へとつながるし、自分へのプライドもあった。

### CASE M-29

(高校1年生～3年生, 女子, 3年間)

#### ①状態

自分よりレベルの高い高校へ入ってしまったことが、不幸のはじまりだった。あこがれて入ったところではあったが、その年から学校の方針が進学一辺倒になってしまい、クラブ活動も成績が悪ければ禁止、毎月英語のサイドリーダーを与えられ、くる日もくる日も英語との戦いであった。それでいて、ちっとも身にならず、むなしく追われる日々であった。夢にまでみていた。

人格までが成績で計られていた。教師も信じられなかった。今思い出しても身ぶるい

する。

とにかく暗い3年間であった。読書に逃げるように本を読みあさっていた。勉強はつまらなかった。苦しさだけであった。自己主張もできない3年間であった。親にも友人にも相談できない毎日であった。

#### ②きっかけ

1. 先生との関係。
2. 成績。
3. 何かの失敗。

英語の小テストがひんぱんにあったが、その前日など机に向かっていても、集中力がなくて、神様にみはなされているようで、パニックになった。当日は山手線に乗って当駅につくと、くぎづけになったように動かなくて、そのまま一周してしまったこともあった。おなかも痛くなったり、精神的に追いつめられていた。

#### ③時期

高校に入学できて1年の夏休みを遊びくらし、2学期が始まったとき。

#### ④原因

1. 心の疲れがあった。
2. 担任の指導に問題があった。

#### ⑤なぜ、立ち直れたか

高校を卒業したこと。大学へ入ったこと。環境が変わったことが一番。

そのまま社会に出たら自分がダメになってしまうと思い、息抜きのつもりで短大に進んだことを今でもよかったと思っている。自分をとりもどせた。親になって、わが子にはこういう思いはさせたくないと思っています。わが子がこういう場にいたら何としても学校を変えてやろうと思います。教師の本質をいやという程みせつけられましたから。子どもの側に立ってやれるのは親にのみできることです。

### CASE M-30

(高校2年生, 女子, 1年間)

#### ①状態

家庭(農業)の状態が悪く、家業を手伝うことが多いため、勉強の時間がなかった。進学を希望していたが、断念せざるをえない状況で、非常に苦しんだように思う。しかしながら、親にはあまり話せるような状態ではなかったので(両親の苦勞がわかりすぎるほど伝わってきていたので……)1人で悩んでいたように思います。

#### ②きっかけ

1. 成績。
2. その他。

自分の選んだ高校に対する不満・不安。

#### ③時期

高校2年の6月頃から3年の始めまで。

#### ④原因

家庭環境に問題があった。

#### ⑤なぜ、立ち直れたか

担任の先生からの指導があったためと思われる。また、担任の他にも親しい先生がいて(部活等で)、親身に相談にのっていたり、その先生と担任、進路指導の先生が連絡をとりあってくれたようです。

### CASE M-31

(高校3年生, 女子, 6か月)

#### ①状態

はっきり言えば不良にあこがれ、学校をさぼるといふことがかっこいいと思ひこみ、登校しないことがありました。家の人に内緒で登校したふりをして、そのまま登校せずに遊びにいってしまうことがたびたびありました。

#### ②きっかけ

友人との関係。

高校1~2年の頃はとてもおとなしい友だちとつきあっていたのですが、3年になって友だちがハデな子に変わり、自分の性格が変わっていきました。しかし、小学校の頃の性格とちがって積極的になり、なんでも先生に対して話せるようになりました。

#### ③時期

高校3年(夏~秋にかけて)。

#### ④原因

その他(自分自身)。

#### ⑤なぜ、立ち直れたか

母の涙を見て、これではいけないと思ひ、きちんと毎日、学校に登校しました。(担任の先生もとてもよい先生で、いろいろと相談にのってくれました。現在でも教師をやっておられますが、ときどきあっています。)

## ■ なぜ、立ち直れたか III

ケース・レポートの最後に、われわれの対応の手がかりを探るため、改めて「効果のあった働きかけ」についてまとめておこう。

表1-1は、これまで語られた内容を関係する領域ごとに短く整理したものである。

①どの年齢段階を通じても家族の理解と支えが必要であり、とくに母親の愛情が大切な要素であった。逆に、両親が葛藤状態にあっ

たり、母親が多忙すぎるなど、家族全体の力が落ちている場合、子どもの問題が長期化しがちである。子どもの問題に出合ったとき、家族を支える視点が重要と言えよう。

②きっかけや原因のところで強調したように、ある友人たちとの関係や学級担任との関係から学校不適応に陥る子どもが少なくない。いじめの問題と対教師不信は、とくに思春期

の子どもたちの心に影を落としていた。子どもたちは、友人の支えや教師のかかわりを求めている。それがうまく得られれば、状況は早期に改善されている。教師の学級経営の力量や子ども理解の姿勢がこの問題のカギを握っているともいえる。

③表の下、「自分自身で」や「時期が来て」

といった項をみると、苦しいその時期に積極的な援助を受け損なった子どもたちの心の歪みが気がかりである。「支え」られなかった体験が、もしかしたら、教師を非難し、わが子を「支え」きれない母親を生み出していないだろうか。第2部では、この点についても検討してみたい。

表1-1 なぜ、立ち直れたか（母親の子ども時代）

	内 容 (当時の学年)
母親・家族	<ul style="list-style-type: none"> <li>・母親の励まし (小3)・母親の愛情 (幼)(小2)・母の涙 (高3)</li> <li>・家族の支え、援助 (幼)(小2) ・両親の苦痛 (小5、中、高)</li> <li>・親の考えと自分の考えが同じだったこと (中3)</li> <li>・人としての成長のあり方を言われ続けていたので (小3)</li> </ul>
友人関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友人関係でまぎらわせた (小2)(小3)(中3)</li> <li>・友だちに相談して (小5) ・友人がいたこと (中)</li> <li>・たくさんの友だちに恵まれた (中)・友だちの励まし (中3)</li> <li>・友人から話しかけてくれたから (中2)</li> </ul>
学級担任・他の教師	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任がかわったので (小3)(小3)(小4)</li> <li>・楽しい担任と出会えたので (小3)</li> <li>・担任がクラスの問題として取り上げ、話し合う機会を作ってくれたので (小5)</li> <li>・担任に打ちあけ、わかってもらえたので (小5)(中3)</li> <li>・教師が親身に相談にのってくれたので (高2)(高3)</li> </ul>
自分自身で	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身の心の戦いで乗り切った (小3)(小5)(中2)</li> <li>・自分自身で解決していくしかないと思って (小5)(中2)(中3)</li> <li>・自分へのプライドがあったから (小5、中、高)</li> <li>・成績を上げてみんなや先生をみかえしてやろうと思った (小5～6)</li> <li>・中学生になって自分自身が変わらなければと思って (小6)</li> </ul>
時期が来て	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間が解決してくれた (小4)(小5)(中3)</li> <li>・クラス替えがあったので (小3)</li> <li>・担任がかわったので (小3)(小3)(小4)</li> <li>・環境がかわったので (中3)(高1)</li> <li>・学校を卒業したこと (高1)</li> <li>・高校生になって、いじめられっ子だったことを知る人がなくなったので (小6)(中3)</li> </ul>

### 3. 学校不適應の実態を追って



前章のケース・レポートを通し、一過性の学校不適應状態からかなり長期にわたる不登校事例まで、様々にその時期を乗り切っている姿をみてきた。この他にもたくさんの回答が寄せられているので、ここではもう一度、全ての事例をまとめてみよう。前掲のように

「学校に行きたくない」気持ちがあった53%と「学校に行きしぶって、親を困らせたことがあった」という25%の母親たちが本章のサンプルである。そこで、両者を多少とも学校不適應状態にあった子どもととらえ、数的にその実態に接近してみよう。

#### ■ きっかけとその原因 III

図1-4は、学校不適應に陥ったきっかけについてまとめたものである(複数回答)。図をみると、全体の48%が友人との関係から不適應が生じており、次いで、先生との関係と、対人関係のつまずきから学校生活に不満を抱き、逃避的になっていく様子が見られる。さらに、成績不振や授業でのつまずきなど、学業面での挫折もきっかけとなりやすいこともわかる。対人関係と学業の2つの側面が適応

援助のカギとなっている点は、昔も今も変わらないようである。

では、原因についてはどうか。研究者の間では、学校不適應の原因に関して、「耐性不足」や「性格的な弱さ」など子ども自身の問題が指摘されることが多く、その背景として「親の養育態度」や、「家庭環境」の問題点が指摘されてきている。では、子どもたち自身は、その原因をどう考えていたのか。図1-5に

示したように7つの項目をあげ、母親たちに子ども時代を振り返ってもらったことにした。

「性格的にひ弱だった」と自分の弱さをあげた者が44%、学級担任、友人など学校側に

原因があったと考える者が22%ずつ、家庭環境に原因があったとする者は、ずっと少なく15%。ただし、これは必ずしも真の原因であるかどうかは別である。

図1-4 学校不適應のきっかけ（母親の子ども時代）

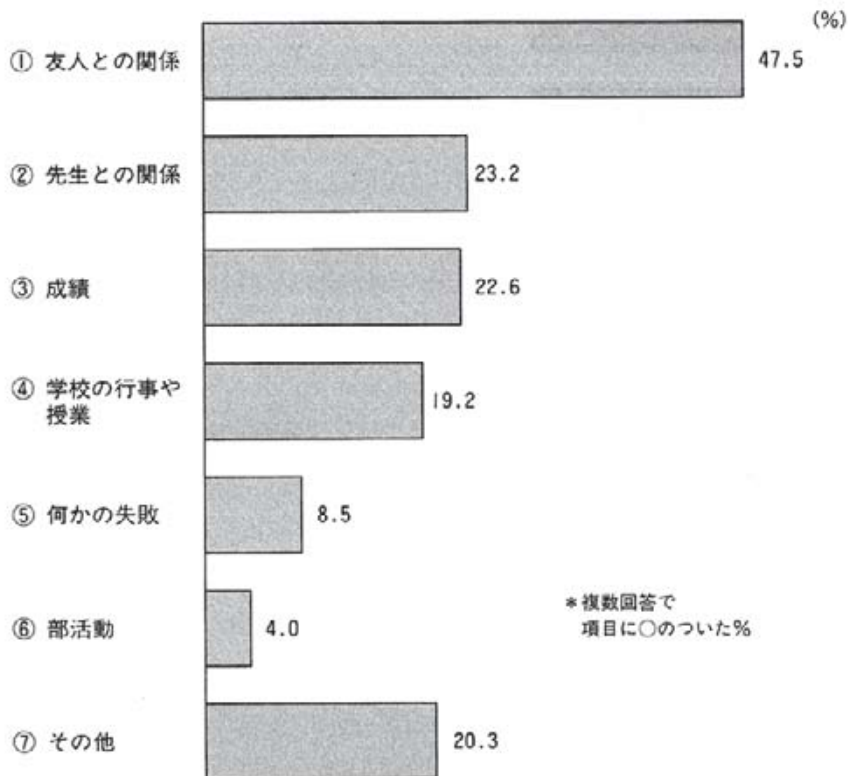
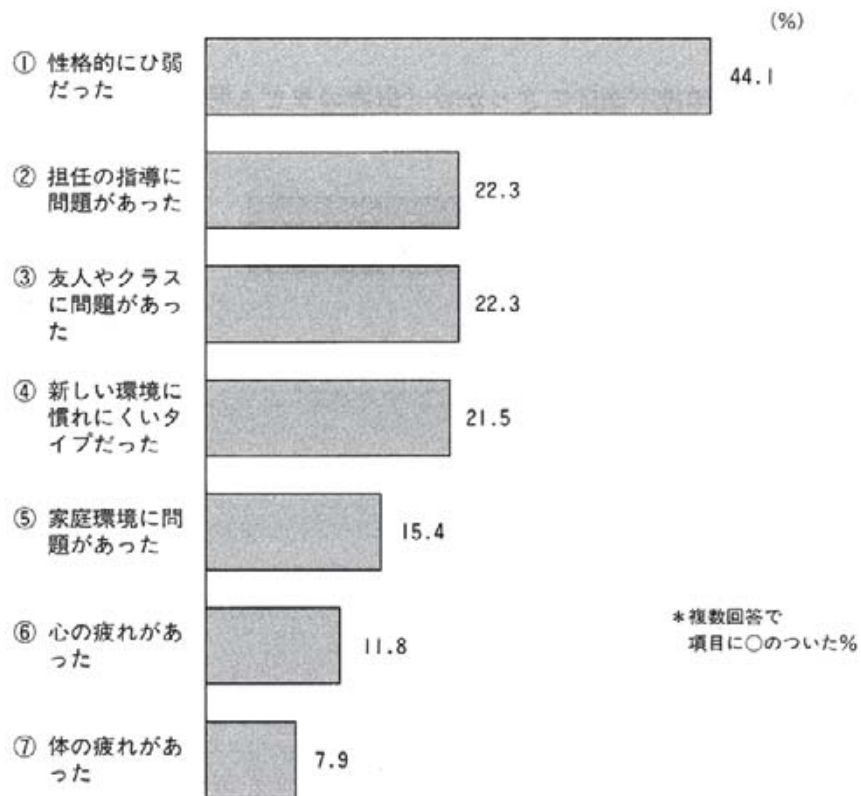


図1-5 子ども自身の考える学校不適應の原因（母親の子ども時代）



## ■ 発達段階との関連で III

前章のケース・レポート同様に、量的なデータでも発達段階を追ってみよう。

まず、きっかけに関してである。表1-2の数値（複数回答）によると、幼・小・中と学齢が上がるほど複数項目に反応が広がる。また、どの段階でも「友人との関係」は断然高いが、続く項目は微妙に異なっている。

小学校時代では、他に比べて「先生との関係」や「何かの失敗」が高い。中学・高校となると「成績」に関するものが次にくるようになる。また、原因についても発達段階による差がみとめられる。表1-3には反応の多かった項目を各段階ごとに4番目まであげた。やはり、第1因「性格的にひ弱だった」については、共通して肯定率が高い。

幼稚園時代では、それに続いて「環境に慣れにくい」があげられている。内気でひっこみじあんなタイプの子どもが、まず幼児期につまずきやすいのであろうか。

次に、小学校時代についてみると、「担任の指導に問題があった」と担任批判が強まる。学級担任との接触が濃いだけに、その関係が

しっくりいかないと不適応感も深刻化するのだろう。ケース・レポートには子どもの目から見て、不当な扱いをする教師像も記述されていた。とくに高学年の女子と教師の関係が難しいように見うけられる。

さて20年近く経った現在、学校の状況は、どうなっているのだろうか。

図1-6、1-7は、本章でサンプルとした学校不適応事例の学齢段階別度数を示したものである。実際に、学校に行きしぶって、親を困らせた事例は、幼稚園や小学校時代に多い。中・高校生になると、はっきり問題を出す子どもは減少する。しかし一方で、「行きたくない」気持ちを抱えて暮らす層はふくらんでくる。

われわれはともすれば、目の前の子どもたちの引き起こす問題だけに引きずられがちだが、形にならないまでも問題発生への準備状態にある思春期の子どもたちについて、もっとその「心」への対応を図るべきではなかろうか。

表1-2 学校不適應のきっかけ

(%)

時期 きっかけ	幼稚園時代	小学校時代	中学校時代	高校時代
① 友人との関係	50.0	50.6	52.2	40.7
② 先生との関係	17.9	29.5	22.1	24.1
③ 成績	17.9	15.9	28.7	29.6
④ 学校の行事や授業	17.9	18.2	24.3	18.5
⑤ 部活動	1.8	2.8	4.4	5.6
⑥ 何かの失敗	3.6	13.1	5.1	7.4

○は最頻値

表1-3 学校不適應の原因×時期（ベスト4まで）

\*（ ）は、○のついた%

原因 時期	第1因	第2因	第3因	第4因
幼稚園時代	性格的にひ弱だった (43.1)	新しい環境に慣れにくいタイプだった (38.9)	友人やクラスに問題があった (20.8)	担任の指導に問題があった (16.7)
小学校時代	性格的にひ弱だった (51.3)	担任の指導に問題があった (26.9)	新しい環境に慣れにくいタイプだった (24.9)	友人やクラスに問題があった (24.4)
中学校時代	性格的にひ弱だった (43.8)	友人やクラスに問題があった (27.0)	担任の指導に問題があった (24.8)	家庭環境に問題があった (22.6)
高校時代	性格的にひ弱だった (40.2)	家庭環境に問題があった (21.5)	友人やクラスに問題があった (20.6)	心の疲れがあった (18.7)



図1-6 行きしぶった時期（母親の子ども時代）

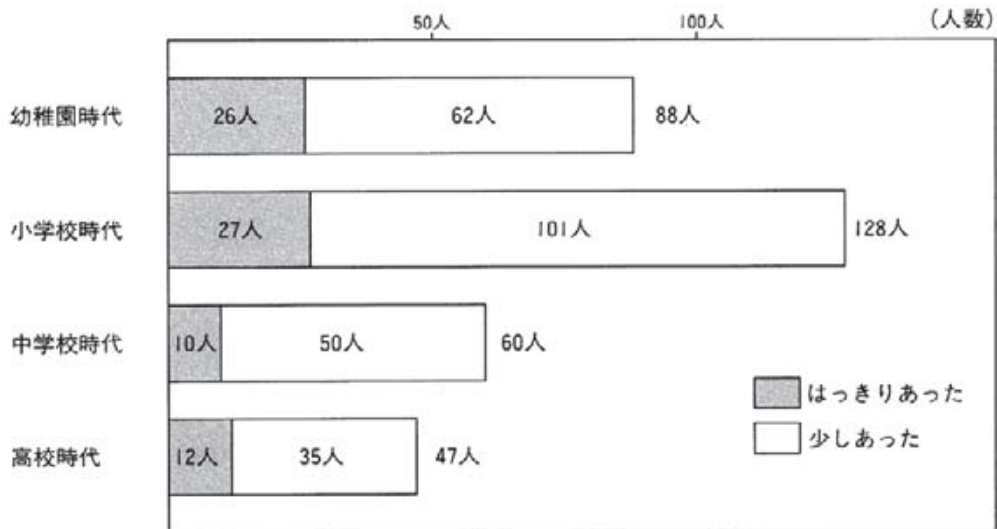


図1-7 学校に行きたくないと考えた時期（母親の子ども時代）

